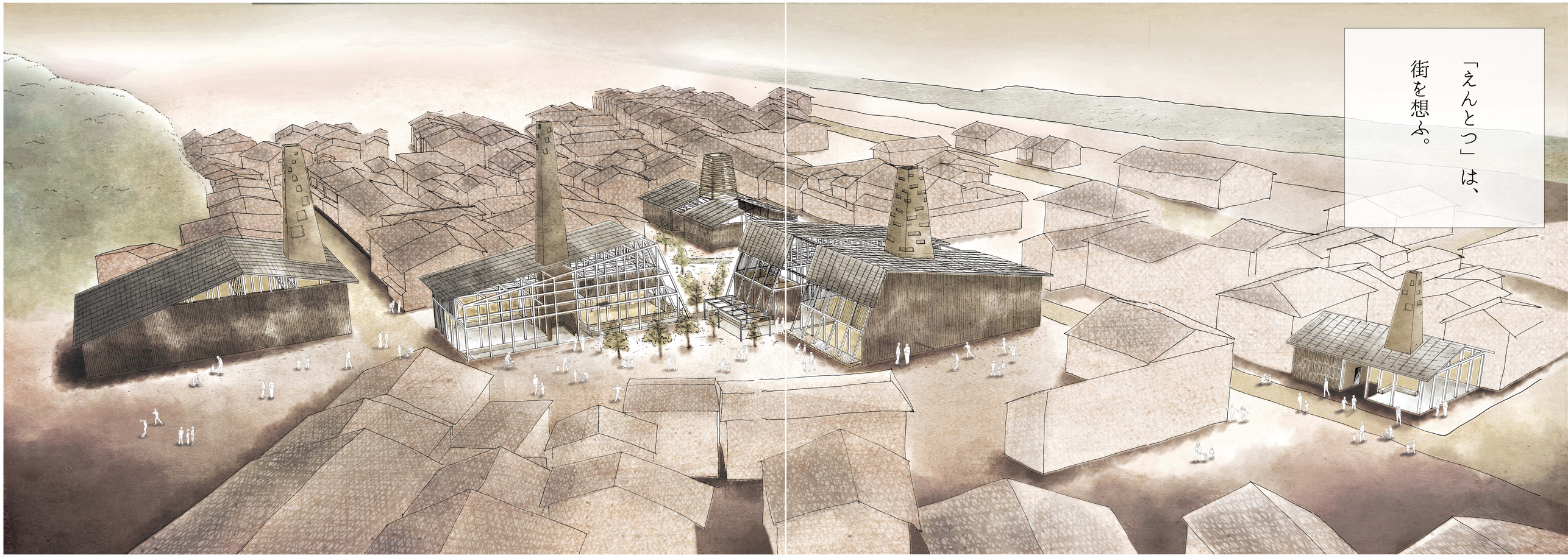


「えんとつ」は、街を想ふ。

00 背景

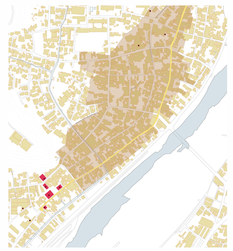


兵庫県たつの市龍野。中世に龍野城の城下町として形成され、醸造業で栄えたこのまちには、今なお古式な町家や醤油工場、土蔵等が残され歴史的な町並みが形成されている。

敷地は重伝建地区の外れ、新旧が共に在る地区である。
人口減少・高齢化が進み、古くからの住民と若い世代の隔たりも生まれる中でこのまちの静かな日常と町並みは緩やかに失われつつある。

このまちの穏やかな営みを守り、未来へつなげていくために。
訪れる人がより深く街を知り、住まう人も訪れた人もより街を好きになってもらえるような、ささやかな居場所をつくる。

01 敷地



東側を南北に流れる揖保川と三方を山に囲まれた傾斜地に位置し、川に沿って町人地が形成されている。18 世紀中期から昭和初期にかけての多様な建築様式をもつ町家、かつての繁栄を思わせる醤油工場遺構や煙突が建ち並び、豊かな町並みがつくられているが、一方で空地も増加している。

対象敷地周辺は重伝建地区と新規住宅地の間、地区内を通るメインストリートの終着点にあり、旧い町並みと新しい建物の入り混じる場所である。この地区の空地を対象とし、
人のつながりのきっかけとなり、まちの営みを繋いでいく起点の場とする。

02 提案

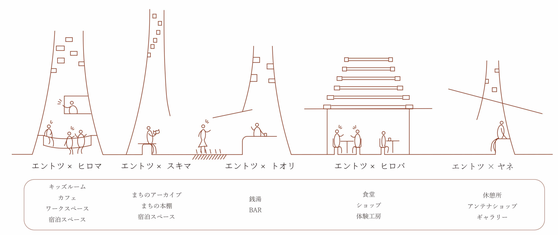


地区内には、本来の役目を失い今なお立ち続ける煙突がある。
まちの風景を特徴づける「えんとつ」をランドマークとして捉え直し、こころの風景・小さな居場所として新たにまちに挿入していく。
主な公共施設や商業施設が対岸に移動したことで地区内には小さなコミュニティの場が少なく、また訪れた人々を受け入れる宿泊施設も不足している。これらを補うため、機能は住まう人、訪れる人双方が利用できる分散型宿泊施設とする。

訪れる人々は、ただ消費するだけの観光ではなく、地域の人々との触れ合いの中でより深くまちを知り、まちに入っていく。
「えんとつ」は内と外、新と旧、人と人をつなぎ、人の営みによってまちは受け継がれてゆく。

03 形態の操作

「えんとつ」には様々なふるまいと機能を設定し、多様な在り方を許容する。「えんとつ」にはふるまいに対応した機能が隣り合い、それらを路地で結ぶことで、誰でも・いつでもいられる場をつくる。
それぞれの「えんとつ」は異なる形態・空間体験をもつ。これらを通して、訪れる人はより街を理解し、住まう人はいまいちど街を見つめ直す機会となる。

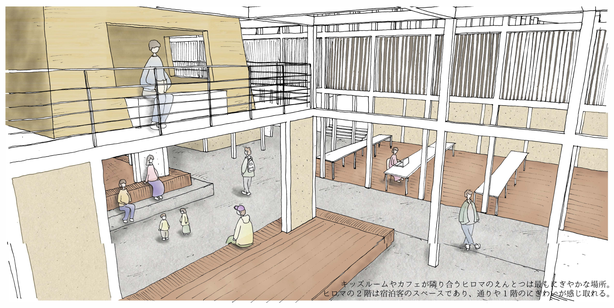


04 「えんとつ」のある街

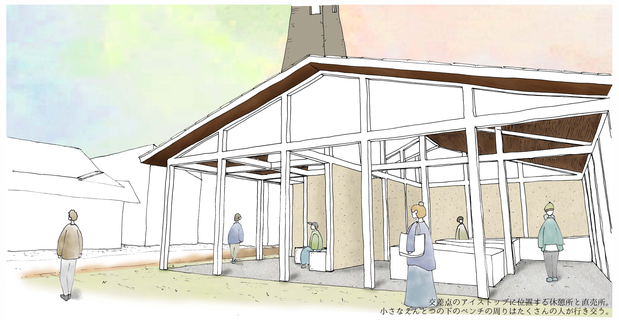
「えんとつ」を中心に施設を設計し、各施設の「えんとつ」を路地で繋ぐことで地域全体のプログラムとする。通りに面したファサードは龍野地区のデザインコードを踏まえつつ、路地のレベルを通りから下げる、天井高を高く取る等の形態操作で内部を落ち着きのある空間とする。

従来の閉じた暗い町家の中に路地を通し、開放的なファサードを設けることで光を取り入れるとともににぎわいやくらしの息遣いを街へと発信していく。路地に面しては縁側やベンチなど小さな居場所を多く設け、住まう人も訪れる人も気軽に訪れて交流できるような施設とする。

将来的には地区内に現在利用されず残っている煙突も活用し、
地域全体へと『「えんとつ」のある街』の輪がひろがっていく。



キッズルームやカフェが隣り合うヒロマのえんとつは最もにぎやかな場所。
ヒロマの 2 階は宿泊客のスペースであり、通りや 1 階のにぎわいが感じ取れる。

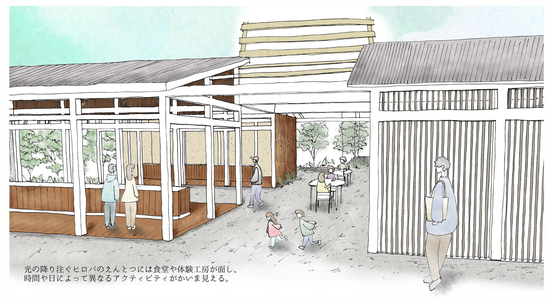


交差点のアイストップに位置する休憩所と直売所。
小さなえんとつの下のベンチの周りはたくさんの人が行き交う。

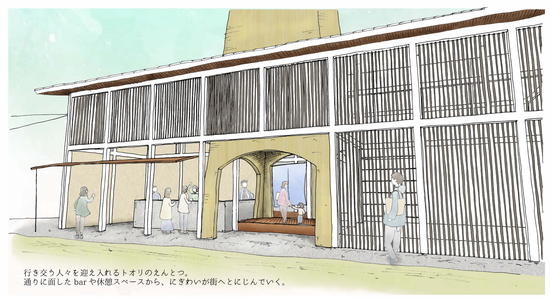




ロジの傍にあらわれるのが小さなスキマ。
まちの営みから少し離れた非日常な空間。



光の降り注ぐヒロバのえんとつには食堂や体験工房が面し、
時間や日によって異なるアクティビティがかいま見える。



行き交う人々を迎え入れるトオリのえんとつ。
通りに面した bar や休憩スペースから、にぎわいが街へとにじんでいく。

